

インドネシアとキリスト教

土佐美菜実

インドネシアの宗教というと東南アジア最大のイスラーム国というイメージから、イスラームを真っ先に思い浮かべる方も多いだろう。しかし、洋の東西を結ぶ重要な貿易拠点として大航海時代より西洋と接触し、さらには植民地支配を経験してきた。そうした歴史を持つインドネシアでは、キリスト教宣教師たちの活動が活発に行われてきた地でもある。そのため、キリスト教についても長い歴史を持つ。以下では、インドネシアにおけるキリスト教を知るための一助となる日本語文献をいくつか紹介したい。

まず、寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』（めこん 二〇〇二年）に収録されている青木恵理子「フロレス島におけるカトリックへの『改宗』と実践」では、インドネシアのなかでも特にキリスト教徒の割合が高いフロレス島におけるカトリック宣教師の歴史を知ることができる。大航海時代以降、ヨーロッパ諸国の交易をめぐる争いとともにカトリック宣教師が本格的に開始され、現地の生活と融合し、フロレス島の「カトリック」を形成していく過程が解説されている。一方、インドネシアのプロテスタント史が概観で

きるものとして伊東定典著『インドネシア・プロテスタント小史―包括的歴史研究』（ふくろう出版 二〇〇六年）がある。本書は、①ポルトガル植民地時代、②オランダ東インド会社時代、③オランダ領東インド政庁時代、④日本占領時代、⑤インドネシア共和国独立以降という時代区分に沿ってインドネシアにおけるプロテスタント史を詳細に知ることができ。

このほか、日本人キリスト教徒によるインドネシアでの活動記録に関する資料もいくつか紹介したい。宮平秀昌牧師『インドネシア伝道記録出版委員会編』『神召に従って 宮平秀昌牧師伝・インドネシア開拓伝道記録』（基督聖教団 一九八〇年）は、一九二七年から一九七六年にかけてインドネシアで伝道活動に奮闘した宮平牧師の記録である。当時オランダの植民地支配下にあったインドネシアへひとりで赴いた宮平牧師の活動記録には、オランダの植民地支配からの独立、スカル政権崩壊という激動の時代を経験していくインドネシアの歴史が色濃く描かれている。同時に、牧師の活動もこうした激動の波に晒されながら進んでいった様子が綴られている。渡辺信夫著『イ

リアン・ジャヤへの道』（新地書房 一九八七年）は、ニューギニア島の西半分にあたるイリアン・ジャヤでの日本軍による占領・侵略の歴史と向き合うために、キリスト教徒である著者が単身イリアン・ジャヤへ赴いたときの、現地の人たちと出会いや交流を記述した一冊である。さらに、木村公一著『インドネシア教会の宣教と神学―開発と対話と解放の神学の間』（新教出版社 二〇〇六年）は、一九八六年以降に日本人宣教師としてインドネシア・中部ジャワで神学教育に従事した著者による、インドネシア教会における神学的潮流を精査した歴史的研究である。本書はインドネシアやキリスト教宣教の歴史、そしてインドネシアにおける重要な宗教思想に関する丁寧な解説の後に、神学的潮流の紹介へ読者を誘っている。そのため、キリスト教や宗教思想に馴染みのない読者にとっても理解しやすい構成となっている。

この他にも日本とインドネシアの関わりに着目するならば、日本占領期について看過することはできないだろう。原誠「日本占領下インドネシアにおける宗教政策―キリスト教の場合」（『上智アジア学』第一九号）「上智アジア学」編集委員会 二〇〇一年）では、日本軍政下のインドネシアにおいて、宗教政策の一環として日本より派遣された宣教師や神

父の活動とインドネシアのキリスト教史における日本軍政時代の意味について論じている。また、奥島美夏「日本のキリスト教会とインドネシア人―制度的背景と課題」（『異文化コミュニケーション研究』第一八号）神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 二〇〇六年）は、日本への移民労働者のなかで形成されていたインドネシア人教会の動きについて論じたものである。その他、磯崎久「バリ島におけるキリスト教徒宅焼き討ち事件報告」（『桃山学院大学総合研究所紀要』第三四巻二号）桃山学院大学総合研究所 二〇〇八年）では二〇〇二年二月一日にバリで起こったキリスト教徒宅の放火・破壊事件に焦点を当てた、その事件の経緯とその背後にある様々な現地の宗教事情についての調査報告である。

この他にもスマトラ島北部に暮らすバタック人に関する文献も重要である。山本春樹著『バタックの宗教：インドネシアにおけるキリスト教と土着宗教の相克』（風響社 二〇〇七年）は、バタック人社会におけるキリスト教との出会いとそのダイナミズムを描いた一冊である。

（とさ）みなみ／アジア経済研究所図書館